

季刊 ひたすらなるつながり

vol.8

2022年8月

みなが幸せに生きられる社会へ

コラム〈01〉福祉論壇

ごきげんな福祉実践者

社会活動家／東京大学特任教授 湯浅 誠さん

特集〈02-06〉

「おめでとう」から「ありがとう」まで

くみなが幸せに生きられる社会へ

発達支援ルームここすてつぷ水俣

上野 真実子さん

新連載〈07-09〉えにしのたねえにしのめ

フリースペースひこねふるさと

コラム〈10〉おすすめの映画と本

護られなかった者たちへ 他2作

コラム〈11-12〉霞が関レポート／県政レポート

厚生労働省 社会・援護局 米岡 良晃さん

滋賀県立精神保健福祉センター 辻本 哲士さん

連載〈13-14〉生きづらさを生きる

アルコール依存症から

『自分』を取り戻すために

寄稿〈15-16〉えにし雑感

甲賀市桑山茜さん、湖南市増野隼人さん、

高島市白崎田鶴子さん、東近江市樋口一さん

滋賀県社協から〈17-18〉

寄稿〈22〉しが福祉論壇

本当の「やさしさ」とは

せんだん保育園 中西 健さん

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌

季刊 ひたすらなるつながり

2022年8月8日発行

通巻8号

発行人 渡邊 光春

〒525-0072 草津市笠山七丁目 8-138

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

定価 500円(税込)

特集

「おめでとう」から「ありがとう」まで

～みんなが幸せに生きられる社会へ～

滋賀県社会福祉協議会 70周年特別企画
ひたすらなつながりフォーラム

水俣を知り 共に生きるを考える フォーラム

参加費 無料

皆さんは水俣を知っていますか？水俣病が公式確認されてから66年が経過した今、差別や偏見、そして社会的に不利な立場にある方々を排除する風潮がなぜ発生したのかを正しく知り、改めて「共に生きる」意味について考えることを目的として当フォーラムを開催いたします。差別や排除などの風潮は、現代のコロナ禍においても社会問題となっています。社会が困難に直面する今だからこそ、「共に生きる」ことについて皆さんと考える、「ひたすらなつながり」の想いを共有させていただければ存じます。ぜひご参加ください。

日時 令和4年 5月 20日 金
14:00-16:00

場所 ビアザ淡海 2階ピアザホール
(大津市におの浜1-1-20)

第1部 講演 14:10-15:10
「今、水俣からつながる思い」
講師 上野 真実子氏

第2部 鼎談 15:20-16:00
「共に生きる」
上野 真実子 × 丸山 英明 × 渡邊 光孝
コーディネーター:金子 秀明

■水俣病とは？
工場排水中のメチル水銀に汚染された魚や貝などを多く食べることにより起こるメチル水銀中毒。昭和31年に熊本県水俣市で公式確認され、昭和43年に国がチッソ株式会社による公害病と認めました。手足の痺れやふるえ、脱力、動きがぎこちなくなる等、さまざまな症状を引き起こす病気です。

主催:滋賀県社会福祉協議会
後援:滋賀県市町村社会福祉協議会連合会、滋賀県民生委員児童委員協議会連合会、滋賀県老人福祉施設協議会、滋賀県社会福祉士人財協会協議会、滋賀県児童福祉協議会、滋賀県障害児福祉協議会、滋賀県障害者スポーツ協会

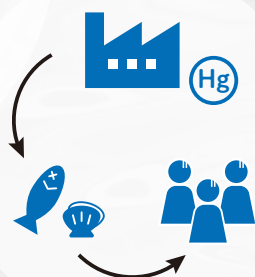
残念なことです。私たちの社会には、差別や偏見、社会的に不利な立場にある人々を排除しようとする風潮があります。今、長引くコロナ禍で多くの人が不安や困難を抱える中で、その風潮は悪い方向に増幅しているように思われてなりません。

社会全体が困難に直面する今だからこそ皆で集まって、改めて「共に生きる」ことについて考えたい—そんな思いから、去る2022年5月20日、滋賀県社協70周年特別企画として「水俣を知り 共に生きるを考えるフォーラム」を開催しました。

講師には、元チッソ水俣病患者連盟委員長 川本輝夫氏の長女で令和3年5月の水俣病犠牲者慰霊式で患者・遺族を代表して「祈りの言葉」を捧げた上野真実子氏をお招きし、川本氏が「水俣病」をどのように捉え、何を求めて運動を続けておられたのか、そして家族として何を感じてこられたか、お話しいただきました。

水俣病とは

工場排水中のメチル水銀に汚染された魚や貝などを多く食べることにより起こるメチル水銀中毒。昭和31年に熊本県水俣市で公式確認され、昭和43年に国がチッソ株式会社による公害病と認めました。手足の痺れやふるえ、脱力、動きがぎこちなくなる等、さまざまな症状を引き起こす病気。



川本
輝夫 氏

水俣病患者の運動体「チッソ水俣病患者連盟」の元委員長。川本氏自身も父を水俣病で亡くし、そのことをきっかけに、未認定患者の掘り起こしや補償を求める直接交渉等、人としての尊厳を取り戻すための運動を始めました。



社会活動家／
東京大学特任教授
湯浅 誠さん

ごきげんな福祉実践者

「第三の居場所」という言い方がある。家庭と学校が第一第二だが、子どもの健全な育ちのためには、加えてそれ以外の居場所も必要、という意味だ。このとき想定されているのは、第一第二が居場所にならない子だけではない。第一第二が居場所になっていたとしても、第三もあったほうがよい。

しかし私たちは、なぜかすぐに「居場所のない子」を想像してしまう。保育園は保育を欠く子のため、居場所は居場所を欠く子のため。一つには、課題解決型の思考に慣れていることがあるだろう。何かに取り組むためには、そこに課題がなければならず、課題は何らかの欠損でなければならない、と考える。お金の欠損、保育の欠損、等々。そうすると、すでに居場所のある子に居場所を作るのは、課題のないところに取組みを作ることになり、贅沢、無駄、ないし不要不急だとなる。福祉には、この発想が強い。困っている人は誰なのか、それはどこにいるのか。マイナスをゼロにする取組み。自分はたいして困ってることがなくて申し訳ない——福祉現場では、ときにそういう気分になせられることがある。

他方、福祉とは「ふつうの、くらしの、しあわせ」だと言われるときには、特に誰かが困っていることを前提にしていない。我が子の何気ない仕草に幸福を感じる親のしみじみした実感が福祉だ。その親や子が何かに困っている必要はない。福

ふくし

福祉論壇

ろんだん

祉という漢語の原義はこちらだという話もある。しかし、福祉という言葉にそのイメージは弱い。だからだろう、最近はWell-beingという言葉を使う人が増えていると感じる。ビジネスの世界でもウェルビーイング経営などという言い方をよく目にするようになった。暮らしを犠牲にするような働き方・働かせ方、地球を痛めつける生産や消費は止めようといった趣旨だ。幸福経営というやや精神論に傾きすぎるし、かといって福祉経営では介護事業者かと勘違いされるので、横文字のまま使われている。概念整理に困ったときによく使う手だ。

そうして、「ふつうのくらしのしあわせ」はますます「福祉」から縁遠くなっていくのだが、では冒頭に戻って、家庭も学校も居場所になっているという子に地域の居場所を用意する取組みは「福祉ではない」ということになってよいのだろうか。私はウェルビーイングを「ごきげんな状態・暮らし」と訳している。ごきげんに暮らすためには、居場所は多ければ多いほどよい。ごきげんに暮らすのに、困っている必要はない。でも、困っている人の見えない福祉を不安に感じる人がいる。その不安が、福祉を困っている人の周辺に張り付かせる。その不安が、福祉の全面展開を妨げる。その不安を乗り越えられたとき、その人はごきげんな暮らしを創出できる、ごきげんな福祉実践者となるのではないだろうか。

しかし、徐々に私たち家族を取り巻く状況も厳しくなりました。大好きな父が悪者扱いされ、人格を否定され、私たちも巻き込まれていました。嫌がらせの手紙もしょっちゅう届きました。学生時代、父のことを知った友達から容赦ないバッシングも受けたこともあります。子どもである私には、自分が水俣病事件の当事者であるという自覚は重すぎました。「当事者であるか当事者でないかで人は差別をする」という言葉に出会いました。その頃の私は、「水俣病事件」に向き合えず、誰にも話せませんでした。自分自身が水俣を差別している、そして、差別を恐れていることを周りに知られたくなかったのだと思います。

そんな私がなぜ語れるようになったのか。それは私が自分から立ち上がることを見守ってくれる人がいたからです。「あんな中途った一人闘ってきたお父さんはえらかった」と声をかけてくれる友達もいます。私の友

私と水俣病事件

由は全くの濡れ衣でした。そんな父でしたが、運動会に顔を出してくれる等、家族のことも決まっていがしろにはしていませんでした。私は父のことが大好きでした。大好きな父が闘っていると誇らしくも思っていました。

母は、どんなときでも明るく、父を支え、父を尊敬するように諭してくれました。出身を聞かれると「水俣病の水俣ですたい」と笑顔で答えるような母です。私がギリギリで頑張っていたのは、母のおかげに違いありません。

水俣病事件はまだ終わっていない

水俣病事件さえ起きていなければ、私たち家族も違う人生を送っていたと思います。水俣病事件のせいで、小さい頃から人が経験しないような経験をしました。それでも、誤解を恐れずに言えば、私たち家族にとって水俣病事件のない人生は考えられないのかもしれない。しかし、まだまだ水俣病で苦しんでいる人がたくさんいます。人から当たり前の人生を奪った水俣病事件を私はまだ許せません。だから、みなさんにも水俣病事件は終わっていないということをお伝えしたいです。

映画「MINAMATA」の上映をきっかけに、これまでと違う世代が関心を寄せてくれるようになったと感じています。そして、今日この場にお越しくださったみなさまもその「つなが



〔右〕1994年に川本輝夫氏が建立した新潟の阿賀野川の石でつくられたお地蔵さま。
お地蔵さまは水俣病を許さない誓いのしるしとして地域の人たちからも大切にされている。



〔左〕お地蔵さまと並んで建てられた卒塔婆。碑は川本輝夫氏が考えたもので、川本氏の死後、妻が石造りに造り替えた。

講演

「今、水俣からつながる思い」

上野 真実子 氏

発達支援ルーム ここすてっぷ水俣 施設長

元チッソ水俣病患者連盟委員長・川本輝夫氏の長女であり、令和3年5月に患者遺族を代表して「祈りの言葉」を捧げた。

特別措置法により平成23年に「水俣病被害者手帳」を取得。

小学校教諭を経て、児童発達支援事業所

「発達支援ルーム ここすてっぷ水俣」で療育に従事。



水俣病とは

水俣病事件といっても、びんと来ない方もたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。水俣病は、水俣市にあるチッソ工場から排出されたメチル水銀に侵された魚介類を食べたこと、いわゆる食物連鎖で起きた食中毒事件です。本来であれば、海の幸をみんなで囲んで食事をいただく、そういう幸せな食卓の中から水俣病事件は起こりました。

父川本輝夫

私の父は水俣に生まれ育ち、水俣病運動で「闘士」といわれた川本輝夫です。そして、私自身も「水俣病被害者手帳」を持っています。父のような普通の人間がなぜここまで運動に駆り立てられたのか、その答えが滋賀県杜協さんの資料の中にありました。『「おめでとう」と誕生を祝福され、『ありがとう』と看取られる』という考え方です。

私の祖父は定年後、漁師になり、祖父の捕ってきた魚介類で幸せな食卓を囲んでいました。ところが、私が生まれた頃から、水俣病の症状が悪化し、3歳の頃に亡くなりました。私にはまだ、その死の意味がわかりませんでした。が、父の運動はここから始まりました。

「俺の親父はたった一人で、牢屋のようなところで死んだぞ」と、父は交渉の席で泣きなが

らチッソの社長に話しかけました。本来であれば身近な家族に見守られ、感謝の中で臨終を迎えるはずが、それさえも叶えてやれなかった父の無念を思います。なぜ人として当たり前の死を迎えられなかったのか、その答えを探すために父は走り続けました。

看護師だった父は、私が小学2年生のときに仕事を辞め、患者の発掘に奔走し始めました。父は水俣病を人権問題と捉え、人権の回復を求めました。父の口ぐせは「人間は幸せになるために生まれてきた」という言葉でした。

私たち家族は水俣病を「水俣病事件」と呼びます。それは、継続的・意図的に無差別・大量に人を病ませ、殺し、自然環境と人間関係の基盤を破壊し、体と心と暮らしに永続的な苦痛を与えたものだからです。

もしもチッソが早急に責任を認めて救済策を講じていたら、水俣病事件も、水俣病を取り巻く状況も、今と全く違っていたのではないかと思います。

「水俣病事件」の解決を求めて、父は東京で自主交渉を始め、その様子は連日、マスコミを通じて全国に報道されました。チッソに勤務する人の多かった水俣では、父の運動に対するバッシングはとても激しいものでしたが、その一方で支えてくれた人もたくさんいました。そんな中、父は一度目の逮捕をされました。その後も何度も逮捕されましたが、どれも理

り」の中にあるのではないかなと思っています。私自身も滋賀県の言葉の「ひたすらなるつながり」、その端っこに加えていただければと思います。

鼎談

共に生きる



上野 真実子 氏（プロフィールはp.03）



丸山 英明 氏（滋賀県健康医療福祉部次長）

昭和61年滋賀県庁入職。障害福祉課長として、全ての県民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現を目指す「滋賀県障害者差別のない共生社会づくり条例」（平成31年4月1日施行）の策定に尽力。



渡邊 光春（社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会会長）

平成25年より現職。「滋賀の縁創造実践センター」発起人であり代表理事（平成26年～30年度）。その理念と実践を滋賀県社協へと継承する際、法人が目指す地域福祉の姿を定款に明記した。



〈コーディネーター〉 金子 秀明 氏

（社会福祉法人さわらび福祉会理事長／滋賀県社会福祉協議会理事）

昭和59年さわらび共同作業所入職。現在は甲賀市・湖南市で障害者の通所事業や相談支援事業、グループホームの運営を行う。精神障害者の地域生活支援、ひきこもりの方々への支援等、相談支援を中心に活動。

金子 私自身、水俣で生まれて18年間を過ごし、上野さんとも高校の同級生でした。水俣をいじめの構造として捉えるなら、いじめる者といじめられる者、傍観する者。その中で、患者の方に思いを馳せながらも、水俣の人間として私は傍観することしかできなかった。そういう意味でも、今回改めて水俣を見つめ直し、彼女の話から気づかされるばかりでした。みなさんには率直な感想とともに、「共に生きる」ことについてご発言いただきたいと思います。

渡邊 「人は幸せになるために生まれてきた」。その幸せが不条理によって打ち消されている実態に立ち向かった川本氏の生き方に感動しました。

滋賀県で言えば、糸賀一雄先生が「自覚者は責任者だ」という言葉を残されましたが、社協の存在としても、自分自身の福祉の考え方としても、やはり福祉のできごとを福祉の中で終わらせず、地域のできごとにしていくこと。そして、声を大きく上げて発信していくことが、非常に大事ではないかと、自戒とともに思いを新たにしたところです。

金子 丸山さんは「滋賀県障害者差別のない共生社会づくり条例」の策定に尽力されましたが、その立場から「共に生きる」についてどう思われますか。

丸山 「共に生きる」とは、それぞれを尊重しあうことであり、声を上げられない方々の代弁をしていくことだと感じています。

「共生社会づくり条例」には、「障害の社会モデル」という考え方があります。端的に言えば、障害や障壁は社会がつくり出しているものであり、取り除くのは社会の責任だという考え方です。無知や無関心、誤解が原因となり差別が起こる。そのようなときに、どう対応するかを仕組みとして条例に書き込んでいます。条例前文に、「県民の共感と連帯、そして協働による共生社会」という言葉があります。これは不利な状況に置かれた全ての人に通じる言葉であり、一人ひとりが参画した共生の営みに通じるものだと思っています。

渡邊 「共に生きる」ことは、社会的な不条理をなくすことにつなが

ると思います。さまざまな価値観がある中で、共通して持ちたいのは、「人は幸せになるために生まれてきた」という価値観です。滋賀県社協は「ひたすらなるつながり」を理念に置きながら、社会的に不利な立場にある方々に縁の橋をかけて、未来を生きる道しるべをつくる、その思いの中でしっかりやっていきたい。

上野 「共に生きる」のキーワードは「みなが幸せに生きられる社会」だと感じています。私自身、生きづらいついてきましたが、それを変えてくれたのはひたすらなる人とのつながりであり、その中で、癒され、変わっていったと実感しています。それぞれ命あるものに同じように価値があつて、それぞれの幸せを生きていけるような世の中を目指せたらいいなと思っています。「共に生きる」ことで、社会の不条理に立ち向かえる。「ひたすらなるつながり」こそが、不条理や生きづらさを打破し、さらに新しい生き方や価値観をつくり出すのではないのでしょうか。



「共に生きる」とは

「なぜ今、水俣のことをテーマにするのか、県民の皆さんにちゃんと伝わるだろうか」

コーディネーターの金子さんと本企画についての相談をはじめた頃、県社協の担当職員の間では、コロナ禍の今と「水俣」がどうつながっているのか、教科書上の事実しか知らない自分たちには伝えられる言葉がないという率直な声があがっていました。

「人間の価値、命の重さは同じだと皆が思えるような社会になれば共生社会に限りなく近づくと思う」「同じ立場にないと本当のところは理解できないだろうが、この機会に関心でいないでおうと思った」フォーラム終了後にこうした声が多くの方から届けられました。

講演の中で上野さんが話された、人として当たり前の死を迎えられなかったおじいさんのこと、そして「人は幸せになるために生まれてきた」というゆるぎない価値観。

私たちも、会場に集まってくださった方たちも、川本輝夫さんの闘いの姿と信念の言葉から、「共に生きる」ことへの熱望を感じ、各々の「未来への道しるべ」を見つけてそれぞれの場に戻っていきました。本会も、さまざまな形で「ひたすらなるつながり」の架け橋を広げていきたいと思います。



福祉現場の気づきから実践へ

現行の制度で解決できない生活課題、地域の福祉課題に気づいた「滋賀の福祉人」たちが、課題解決に向けて実践しているさまざまな取り組みをご紹介します。

たね

なぜ、年齢や障害のあるなしで分けるのか。
地域で暮らしている人には変わりない。

なぜ、年齢や障害のあるなしで分けるのか。常々、それが疑問でした。「地域で暮らしている人には変わりないのに」。彦根は、森田さんが生まれ育った地域でもあります。「法人として、地域の一員としてできることがある、というのは始めるきっかけとして大きかった」

提供するメニューはというと、お風呂や食事、月1回のイベントなどで、それほど難しくありません。さらに、先行して取り組んでいる高齢者の施設に見学に行くと、子どもたちがわが家のようにゆっくり過とごしていました。「こういう家庭的な雰囲気なら、うちでもできると思います」

ニーズに気づき、自分にもできることがあると知ってわいてきた「ほっとけない」の思いから「ふるさと」でのフリースペースの取り組みが始まりました。

フリースペース のたね

地域には、さまざまな理由から学校に行きにくくなっていたり、家庭の中に安らぎがなかったり、また子どもらしく大人に甘えることができなかったりといった状況にある子どもたちがいます。こうしたさびしさやしんどさを抱えている子どもたちを見守ってくださる地域の方たち、関係機関の方たちからは、地域で子どもを支える場がもっと必要という課題提起がありました。

フリースペース ひこねふるさと

社会福祉法人近江ふるさと会
障害者支援施設ふるさと

施設長
森田由美さん



あたたかいご飯とお風呂があり、24時間大人がいる社会福祉施設を活用した子どもの夜の居場所「フリースペース」。滋賀の縁創造実践センターのモデル事業として始まった取り組みです。生きづらさを抱える子どもを孤立させず、地域みんなで支える取り組みで、彦根市の障害者支援施設「ふるさと」は、2016年からこの事業に参画しています。当初、高齢者施設が中心だった中で、障害者施設を活用した初めてのケースとなりました。

め

家族の文化や家庭環境、困りごとは
家庭ごと、子どもごとに違う。

フリースペースは、子どもを真ん中において、施設職員と地域のボランティア、専門職、社会福祉協議会、福祉行政や教育行政などが役割分担しながら実践しています。活動は週1回。学校が終わると子どもを迎えに行き、一緒にご飯を食べて、遊んでお風呂に入ります。

「ふるさと」に初めて来ることになったのは、2人の兄弟姉妹でした。親は夜勤がある不規則な仕事で、朝が弱い子どもたちは学校に遅刻しがち。また、家ではカップラーメンばかり食べているというので、食育をメインに据えました。子どもたちも最初は緊張気味でしたが、「ここは安心していい場所で、信頼していい大人なんだと感じてもらえるように」と、関係づくりに力を入れました。

職員は協力的で、利用者が子どもたちを受け入れるのもスムーズでした。活動をのぞいたり、テレビを一緒に見たり。障害

のある人との出会いの場が自然にあることで、子どもたちは利用者や「普通の大人と変わりない」と捉えている様子。「利用者さんも楽しみにして、そのことが施設の職員にとっても活力になりました」

月1回の季節行事では、たくさんのお祝いがありました。「パーベキューって何？」という言葉が出ました。子どもだから花火が好きだろうと思って準備をする、と、「初めてやから怖い」と打ち明けてくれました」と森田さん。いろんな子どもたちがいることを知るきっかけになったのです。子どもたちは成長し、遅れず学校に行けるようになり、学力もついていきました。そして、よい循環が生まれたのは、施設と子どもだけではありません。最初は施設や社会への不信任があったお父さんにも変化が現れ、小学校の卒業時には「大変お世話になりました」とお礼が寄せ



られたのです。「子どもの成長を喜んでくださり、父の日には必ずプレゼントを作っていた気持ちも伝わったのかもしれない」と森田さん。

現在「ふるさと」は、別の兄弟姉妹3人を支援しています。新型コロナウイルスの感染拡大が深刻だったときは、宅食など別の形で事業を継続。4月からは場所を変えて活動に取り組んでいます。子どもたちは、広いスペースで思いきり遊べるのがうれしい様子だと言います。

活動を通して森田さんが気づいたのは、「家族の文化や家庭環境、困りごとは家庭ごとに違う」ということ。それぞれの家族、それぞれの子どもにとっての幸せをサポートできるように、試行錯誤を続けています。



【右上】コロナ禍でも対策を講じて活動を継続

【右下】子どもも大人も真剣勝負！

【左】子どもたちが施設の職員や地域のボランティアなど大人を独占できる体制（マンツーマン：子ども1人対大人1人）をつくっている



おすすめの映画と本



まも 護られなかった者たちへ

△あらすじ▽

東日本大震災から9年後の仙台で、被害者が全身を縛られた状態で餓死する連続殺人事件が発生します。被害者の共通点は、生活保護担当のケースワーカーだったこと。県警のベテラン刑事・苦篠誠一郎は、寡黙な青年・利根泰久を容疑者として逮捕します。取り調べで自身が連続殺人の犯人だと自白した利根、果たしてその真実とは…。

茶色い港町、泥まみれの車、憔悴した人々。

冒頭の数分間で東日本大震災発生当時の記憶がまざまざと蘇ります。

この映画は、震災後の生活保護をめぐり、ストーリーが展開していきます。不正受給に毅然と立ち向かうケースワーカー、その一方で行政側の都合で本当に必要な人たちが受給できない現実がリアルに描かれていて、否応なしに感情移入してしまいます。題名の通り、この映画の登場人物はみんな「護りたいものを護れなかった」と思いながら生きる人々です。その交錯する思いが、やがて悲劇を生みます。「死んでいい人なんて、いないんだ」——豪華キャストの名演で魅せる震災・復興の最中の悲劇と再生の物語に、改めて「共に生きる」ことについて考えさせられる、見応えたっぷりの作品です。



Blu-ray&DVD「護られなかった者たちへ」
2022年4月22日(金)発売 発売・販売元：アミューズソフト
©2021映画「護られなかった者たちへ」製作委員会



52ヘルツのクジラたち

著者：町田そのこ / 出版社：中央公論社

△あらすじ▽

家族に虐げられてきた主人公の貴瑚。すべてを捨てて、亡き祖母がかつて住んでいた海辺の町に移り住みます。そこで、自分と似た境遇で言葉を発することのできない「ムシ」と呼ばれる少年と出会います。彼を放っておけない貴瑚は、どうにか救おうと動き出します。



クジラはまるで歌うように仲間とコミュニケーションを取ります。しかし、世界にただ1頭、他のクジラは聞き取ることができないほど高音の「52ヘルツ」で歌うクジラが存在します。「ムシ」と呼ばれる少年がたしかにあげている、しかし誰にも届かない「52ヘルツ」の助けを呼ぶ声を、必死で聴き取り受け止めようと模索する貴瑚の姿に、自分はこれまで誰かの「52ヘルツ」を聴き逃していたかもしれない、と考えさせられます。誰かの「52ヘルツ」を聴き取り、受け止められる存在でありたいと思わされる作品です。



かがみの孤城

著者：辻村深月 / 出版社：ポプラ社

△あらすじ▽

学校で居場所をなくし、閉じこもっていた中学1年生の安西こころ。ある日、こころの目の前で、部屋の鏡が突然光り始めた。輝く鏡を抜けた先には、城のような不思議な建物。そしてそこにはこころを含む似た境遇の7人が。はたして7人が集められた理由とは？



いじめや不登校、家族との微妙な関係など、さまざまな思いを抱えた子どもたちが集められた「かがみの孤城」。7人の中学生それぞれの個性とそこに至る背景や心理描写が丁寧に描かれています。自らの居場所、家族との絆、人とのつながり…読み手によって受けとめ方はさまざま。そしてなにより、物語の最大の謎である「城」とは？「オオカミさま」と呼ばれる城の管理人はいったい何者？ラストにかけての疾走感と伏線の回収が鳥肌もの。生きづらさを感じているすべての人に贈る物語は二度読み必須です。



フリースペースについてさらに詳しく知りたい方はガイドブックをご覧ください。「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」ホームページで公開しています。 <https://shiga-hug.jp/1259.html>



フリースペースの実施体制

フリースペースは、地域の実情に合わせ、多様な主体が連携して活動を実施しています。



「ふるさと」は、関わった子どもたちを見守っている「ホーム」のような存在です。「ここを卒業しても、しんどくなったらいつでも来ていいし、ここはずっとあるよと伝えていきます。関係性は決して途切れない」と森田さんは言います。「その子の人生の歴史に自分が加わることが素敵。何年も経って、『しんどかったとき、あのおばちゃんに会わなくてもよかったな。やってくれたことを次の世代にしてみよう』と思ってもらえるような存在になれたらうれしいですね」

モットーにしているのは、一瞬一瞬を大事にすること。「子どもたちにとつての『この一瞬』は大人が考える以上に重要。大人が考える以上に重要。」



子どもたちにとつての『この一瞬』は大人が考える以上に重要。

また、やりっぱなしで支援者が満足するのではなく、フィードバックすることも忘れません。そして、今後力を入れて取り組みたいのは、与えるだけでなく、子どもたちが自分で生活する力や生きていく力をつけることです。

「対象が違ってても、支援のあり方はリンクしている」と森田さんは言います。「現状の支援は縦

割りだけれど、専門性が重なっていると、とても厚い。この事業のように、多様な力が掛け合わさることのできるこの幅も広がるので、みんなで、『まるっと福祉』をつくりあげていきたいですね」。開始から6年が経ち、チームで支えることの効果も実感しています。



県政レポート

さまざまな主体と協働して滋賀の福祉の創造実践に取り組み県行政の立場から、福祉や共生社会をテーマに課題提起や政策情報をレポートしていただきます。

= REPORTER 略歴 =

滋賀医科大学大学院修了後、滋賀県や京都府の精神科病院で勤務。1993年から滋賀県立精神保健福祉センター・医療センターで、一般精神科、思春期精神医療、地域保健活動等に従事。専門領域は精神医療、地域保健。



辻本 哲士

滋賀県立精神保健福祉センター 所長



———寄り添い支援とコロナ禍

コロナ禍によって、日常生活は大きく変化し、様々な問題が出てきています。家庭でステイホームを求められるのと同時に、家族内感染を避けなければいけない状況になりました。家という閉鎖的な空間の中で、DV・家庭内暴力や児童虐待が起こりやすくなっています。健康面では、コロナ感染症への対策はもちろん、メンタルヘルス課題として、うつや薬物・アルコール依存、ひきこもり、自殺問題が取り上げられています。ギャンブル、ゲームやインターネット～新しい依存対象も出現しています。コロナ罹患後症状(後遺症)の動向も気になることです。経済・生活問題や勤務問題では、失業などで収入が減少し、生活が苦しい方に対して衣食住を支える仕組みが求められています。学校では、困難な状況に追い込まれた学生・生徒に対して教育・保健医療福祉の連携、ストレス対処等の予防啓発が重要になります。

コロナ禍によって三密(密閉・密集・密接)を避ける生活を強いられるようになり、対人関係において心理的・物理的距離を保たざるを得なくなりました。寄り添い支援を生業とするわれわれにとって、最大の武器?を取り上げられたかたちです。対面支援が制限される中、孤立を深める方に対してどのような支援手段があるか?長期にわたるストレスや葛藤にどう対応するか?多くの人々が悩まれていると思います。

一方で新しく手に入れたモノ、気づけた援助法もたくさんあります。オンライン相談や会議、SNSを活用した情報交換、Webによる関係機関連携、動画配信による研修会・講演会等々(まだまだICTツールには慣れませんが…先日、YouTubeで自分の講演シーンを見ることができ、驚きました!)。生活支援事業での相談・制度等によってセーフティネットが一定程度有効に機能しています。ワクチン接種においても接種券が届き、接種日の予約を取り、接種会場に行って問診を受け施注される…各段階で様々な関係者とやりとりすることになります。繋がりやすさが当たり前前の社会の中で、コロナ禍によって繋がりが作られる機会もできました。

最近、コロナ禍で指摘されている課題は、コロナ感染症によって新たに発生したというよりは、以前から地域が抱えていた課題が、コロナ禍の中で浮かび上がってきたものだと考えるようになりました。「感染症拡大の影響により、これまで存在した課題が明らかになった」「対策が不足していた部分が、コロナ禍で、今、表面化した」という認識です。今後、コロナ禍前に戻るもの戻らないものを整理し、失くしたモノより得られたモノを活かし、支援の展開・再構築を考えていくことが必要になります。「相手を受け止めること」の重要性を見直し、具体的なスキル(専門性よりも誠実性)をもった寄り添い支援が求められます。コロナ禍が終息し、以前から積み重ねてきた連携・協力を基盤に、新しい人間関係・寄り添いがひろがる世の中～楽しみです。



米岡 良晃

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部
障害福祉課 課長補佐



障害福祉施策は、平成18年の障害者自立支援法の施行により大きな転機を迎え、その後、数度の改正を経て、障害のある方々の生活を支える支援体制の充実を図ってきました。昨年春からは社会保障審議会障害者部会において、更なる制度の見直しに向けた検討を進め、去る6月13日、同部会での議論のとりまとめが行われましたので、その内容をご紹介します。

まず、1つ目の柱が「障害者が希望する地域生活を実現する地域づくり」です。かつては、障害のある方の生活の場として、入所施設や病院における支援が中心でしたが、いまや全国で15万人以上の方がグループホームで生活されるようになっています。その中には、一人暮らしや家族、パートナー等との生活を希望される方もおられ、こうした希望に応えることも求められています。また、障害者の重度化・高齢化が進む中で、親亡き後も見据えた地域生活の支援体制の強化も喫緊の課題です。こうした問題意識の下、グループホームの支援内容として、一人暮らし等への移行支援や退居後の相談等を充実することや、地域全体で障害者の居宅生活を支える「地域生活支援拠点等」の整備を市町村の努力義務とすること、などを検討しています。

2つ目が「雇用と福祉の連携強化による障害者の就労支援の充実」です。当事者のニーズや社会経済状況が多様化する中で、障害者が働きやすい社会を実現するため、一人一人の希望や能力に沿ったきめ細かい支援が求められています。このため、障害者の就労先・働き方のより良い選択を支援するため、就労アセスメントの手法(就労能力や適性の客観的な評価を行うとともに、本人と協同して、ニーズや強み・課題を明らかにし、就労の際に必要な支援や配慮を整理すること)を活用した支援の創設や、企業等での働き始めに勤務時間を段階的に増やしていく場合などに、通い慣れた就労継続支援事業所等を一時的に利用できることを法令上明確にすること、などを検討しています。

3つ目が「障害福祉サービスの質の確保・向上」です。利用者のニーズに応じた良質なサービスの提供や事業所の整備のためには、データや地域ニーズに基づく施策・運用が求められています。このため、障害福祉分野についても、医療や介護と同様に公的なデータベースを整備することや、都道府県知事が行う事業者の指定の際に、より現場に近い市町村長が意見を申し出ることができる仕組みを創設すること、などを検討しています。

障害のある方ご自身の、どのように暮らしどのように働きたいかという願いをいかに実現していくか、当事者中心の視点を忘れず、障害福祉施策の更なる充実に取り組んでいきたいと考えています。

霞が関レポート

滋賀の福祉の創造実践に深く関わってくださった厚生労働省の現役キャリアから、国の政策の動きや重要な視点についてレポートしていただきます。

= REPORTER 略歴 =

2007年厚生労働省入省。雇用均等・児童家庭局、医政局、社会・援護局、農林水産省(出向)、職業安定局等を経て、現職。2013年4月より2年間、滋賀県草津市役所へ出向。

生きづらさを生きる

滋賀県断酒同友会の会員は本人88人、家族会員62人。入会のきっかけは、病院などからの紹介が約7割。ほかに、市役所などでパンフレットを見て来られる方や、本人が病気を認めず、家族だけで入会される方もおられます。

今号と次号の2回にわたり、アルコール依存症に向き合う断酒同友会のメンバーをご紹介します。高島市の安曇川公民館で毎週開催される高島支部の例会に参加するAさん(71歳)に、断酒までの道のりをお聞きました。

アルコール依存症から『自分』を取り戻すために

—断酒会で仲間と出会い病気と向き合う—

依存症になったのは40歳を過ぎた頃

「原因のひとつは、寂しさ。話す人がいなかった。もうひとつは、余裕がなかったんですね。長距離通勤で、仕事もきつく、ストレスがたまっていたのだと思います」

若き日のAさんは単純にお酒が好きで、仕事終わりに同僚とスナックに通っていましたが、同僚が転勤し、深酒をするようになりました。仕事が忙しくなり、飲酒量は増える一方。結婚後も、スナック通いは続きます。家に仕事のストレスを持ち込まない主義で、飲んだくれて帰る日々。「大量に飲んでも酔う感じがなく、やめられない。1人でスナックに通ううち、歯どめがきかなくなりました」。お酒は、仕事を完了させるためのエネルギー源でした。

「危ないと思い始めたのは、検診で肝臓の数値が引っかかってからです」。医師からは「お酒は控えめ

に」と言われ、出された薬は飲んでいだけれど、飲酒量は減らず。会社がある大阪から高島市の自宅に帰る電車で、いつもビールを飲んでいました。体調は悪化し、下痢と冷や汗が止まらない。朝の通勤では山科駅で降りてトイレに行ったり、会社にたどり着けず欠勤したり。家族のすすめで病院に行き、診断書をもらって休職することになりました。

車のトラブルをきっかけに断酒

休職中も、缶ビールを片手に自転車に乗って近所を徘徊。近所で噂になると、今度は車に乗るようになりました。車通りの少ない道を、時速20kmぐらいで音楽を聞きながらほろ酔い運転。吐血した時には死も頭をよぎったけれど、それでもやめられず、お昼まで寝て、夕方から起きて飲む。その繰り返しでした。

断酒のきっかけは、車のトラブルでした。溝にはまった車を出す手助けをしてくれた人が、ビールの空き缶を見つけて通報したのです。パトカーが来て、2ヶ月間の入院生活が始まりました。「心身はボロボロだったので、ゆっくり休めると思いました。作文を書かされ、お酒に別れを告げた時は、涙が出ました。自分は職場の仲間と全く違う世界に入ったんだと。どん底の気分でした」。けれど、朝6時前に起きて病室を掃除し、ラジオ体操や散歩をするうち、気分が変わります。同室の仲間と交流し、入院中から断酒会にも通いました。開放病棟で、ビールを買ってしまう人もいましたが、Aさんはそういう気持ちに

はなりません。退院後1ヶ月間、自分でリハビリし、仕事に復帰しました。

断酒のキーワードは「続ける」

退院した日に地元の断酒会に入会、54歳のときです。「断酒会での経験は、今の私をつくってくれたと思っています。一番いいのは、考える時間が与えられることでしょう」。ずっと仕事に追われていたAさんは、ここではじめて、他の人の体験を聞きながら、これまでのことや将来のこと、家族のことをじっくり考えました。体験を話すと、頭の中を整理でき、さまざまな気づきがありました。

「断酒が成功したもうひとつの理由は、長女が不登

校になり、家族のことを真剣に考えたことです」帰宅後、毎日のように娘と妻の3人で長距離ドライブをしました。断酒会に通い、自分と向き合う日々。「娘も元気になり、大学にも合格し、娘が変わったことで、私も変わっていききました」

お酒をやめ続ける。日記を欠かさずつけ続ける。毎日ウォーキングと体操を続ける…。「続けてこられたことが自信になり、ポジティブな気持ちに変わってきました」。アルコール依存症になってつらい思いをしましたが、Aさんは振り返って思います。「それ以上にね、得るものがたくさんあった。だから人生決して無駄なことはない。そして、生きる上で一番大事なこと、幸せの源は、元気であることだと実感しています」



滋賀県断酒同友会 会長 松本浩二さん

断酒会の基本は、お酒に関することを自由に話せる場であるということです。「飲みたくないのに飲んでしまう」と周囲の人に打ち明けても、「わがまま」だと思われがち。周囲に理解されないつらさがあるのですが、断酒会では受け入れられるので、安心できます。

もともとお酒が好きな人が多いので、家族や友人、会社から「お酒をやめなさい」と言われると、「お酒に助けられてきた」「お酒があるから生活できている」という反発の気持ちがわいてきます。自分が病気であるという事実も、お酒をやめなければいけないという現実も受け入れられず、拒否したくなります。断酒のポイントは、どれだけ自分の病気に向き合えるかということ。いろんな人に話を聞いてもらい、病気に向き合う気持ちが出てきたら、やめていけるのではないのでしょうか。「わかってもらえる」ということは、自分の心の重荷を下ろせるということ。その感覚は、私も断酒会に入った頃はよくありました。自分のことを話し、お酒について考える、そういう時間が大事なのです。何年も先を行っている先輩がいて、同じ頃にやめた同期もいる。モデルやライバルがいることも大きいですね。

近年は若い人や女性の依存が増えていますが、断酒会はまだまだ参加が少ないのが現状です。性別や年齢に関わらず、困っている方がおられたら、ぜひ断酒会を訪ねてみてください。一緒に考えましょう。

〈滋賀県断酒同友会事務局〉TEL 0748-72-3792 <http://shigadansyu.com/>



滋賀県断酒同友会では、13支部が週1回の例会を開催しています。例会に継続的に出席し、仲間や家族の体験談に耳を傾け、自らの体験を話します。

・・・・・・・・・・「えにし雑感」では、みなさまからのご寄稿を随時募集しています！・・・・・・・・・・

〔応募方法／応募先〕以下の原稿をWord形式でEメールにて事務局 (enishi@shigashakyo.jp) までご応募ください。

◆ タイトル20字程度＋本文400字程度 (寄稿者のお名前とお住まいの市町を掲載させていただきます)

- ◆ 次のいずれかのテーマでご寄稿ください。
- ①「ひたすらなるつながり」と私
 - ②滋賀の福祉に携わる(活動する／働く)喜び
 - ③滋賀の福祉に携わる(活動する／働く)仲間へのメッセージ

えにし 雑感

Enishi Zakkan

ふとした瞬間に感じる「ひたすらなるつながり」。

福祉の現場だけでなく日常生活の中で感じたつながりを
4人の方に私的な視点で文章に綴っていただきました。

私のいまとこれからをつくる『つながり』

私は高齢者の事業所で働いています。前職はギフト類の企画・販売をしている企業で働いていました。大学で福祉を専攻していたため、社会福祉士として働きたいと考えていましたが、ご縁があり、その企業に就職しました。入職後、人事部長に呼び止められ、「面接のときに言っていた『いつになるかわかりませんが、福祉の仕事がしたいので、チャンスがきたら辞めます』の言葉、面白かったよ。チャンスがあればいいね」と声をかけられました。生意気な発言をあたたく受け止めてくださった会社の方々には感謝しかありません。

数年後、恩師より連絡があり、チャンスがやってきました。会社相談すると快く送り出してもらうことができました。今の仕事に就き、現在に至ります。若いときは『つながり』など意識したこともありませんでした。しかし今は、周りの方々との『つながり』を実感します。様々な人とつながり、つながっていたからこそ『いまの私』があるのだと。まだまだ続く人生…たくさんの方とつながっているから『これからの私』もある。『ひたすらなるつながり』に感謝し、日々を過ごしていきたいです。

(甲賀市／桑山茜)

「輪・話・和」と「つながり」

福祉の仕事に長年従事した後、自分の住んでいる地域に目を向けると、名前や顔がわからず、つながりの希薄さに愕然としました。健康推進員や福祉委員の依頼が舞い込み、これは地域を知る・つながるチャンスと思い引き受けました。一方、こども食堂に取り組みたいと夫や友人に話したところ「やってみたら」と応援され、5年前【わつなぎ食堂】を立ち上げました。家庭的な雰囲気を中心に地域の輪・会話の話・和の和「3つのわ」を掲げ、将来子どもたちが地域の一員としてつながり、育った地を大切に思えるおとなになってほしいと願って取り組み続けています。

また、ボランティア仲間の間では「参加数ではなく、来てくれたことに意味がある」ということを合言葉にしています。

みんなが手をつなぎ、人がつながり、地域をつなぐ、小さな輪から大きな輪へと広がっていく『つながり』を今後も大切に取り組んでいきたい。

子どもの笑顔は、地域の活性につながる栄養素！この栄養素となる子どもたちと一緒に温かく見守っていきましよう。

(高島市／白崎 田鶴子)

そういう近所のおじさん

いつものように仕事に行こうとすると、家の裏の道端で集団登校の子どもたちが何やら立ち止まっています。どうしたのかなと思ひ様子をうかがうと、泣いている子どもを他の子どもたちが取り囲んでいました。

「どうしたの？」と声をかけると子どもたちはこちらを見るような、見ないような…。「何かあったのかい？」と再び声をかけると、それを見ていた妻が「いのよ。子どもたちは自分で解決するんだから…。いのよね、そういう近所のおじさん」と言い捨て、そのまま仕事に行ってしまいました。それでも、気になり車を点検しているフリをしながら、チラチラと子どもたちの様子をうかがっていると、妻の言った通り、泣いていた子どもも気持ちを持ち直したのか何事もなかったかのようにみんなと一緒に帰ってしまいました。

子どもたちは自分たちで解決する力をちゃんと持っているやなと感心した一方、君たちを気にしている「そういう近所のおじさん」がいるのもありかなあと。「ひたすらなる、ゆるゝいつながり」と私。

(湖南省／増野隼人)

「ひたすらなるつながり」と私

私は地域の「ふれあいサロン」や「子ども食堂」でレクリエーション活動をしています。東近江市の「ひがしおうみ・回想キラリ☆サポーター」にも登録して市内の「ふれあいサロン」で能登川博物館の民具を使つての回想法ボランティアもしています。いずれも「福祉レクリエーションワーカー」として学習したことが役に立っています。

平成30年10月に「人生100年時代を迎え健康で長生きする方法」を学ぶため、レイカディア大学草津校41期「健康づくり学科」に入学し、健康に暮らすためには「栄養」「運動」「社会参加」が必要である事を2年間で学びました。卒業後は「健康づくり学科」全員(18名)でクラスサークル「健交41」ができ、そこを中心に活動をしています。「レイカディアえにしの会」にも全員が参加しています。

レイカディア大学を卒業することにより「ひたすらなるつながり」の輪がたくさんできたので、これからもクラス仲間と一緒にいろいろな活動に参加したいと思います。

(東近江市／樋口一)

県社協レポート

滋賀県社会福祉協議会では「ひたすらなるつながり」の理念のもと、福祉関係者や地域のみなさんとともに、さまざまな事業を実施しています。このコーナーでは本会の取り組みや職員の思いを紹介します。

(レポーター：地域福祉課 細川貴代)



人材センターの窓口では、日々、キャリア支援を行う相談員が来館者の相談に応じています。

少子高齢化の中、滋賀県では2045年頃に高齢者人口のピークを迎えます。一方で2025年に約3千人、2040年には約1万人の介護職員が不足する見込みで、介護・福祉の仕事の担い手確保は喫緊の課題です。滋賀県介護・福祉人材センターは、滋賀県社会福祉協議会が運営する県内唯一の「介護・福祉専門の無料職業紹介所」で、介護・福祉人材の確保や定着支援に取り組んでいます。

「介護・福祉の仕事」と言っても分野や仕事内容、求職者が抱くイメージもさまざまです。センターでは、より多くの求職者が施設・事業所と出会うための場作りに力を入れています。そのひとつが「ふく・楽CAFE」です。福祉の仕事を目指す人や興味を持つ人が、現場の第一線で活躍する職員から仕事の魅力を聞くことができる対話形式の場で、カフェのようなくつろいだ雰囲気が特徴です。待遇や仕事のリアルなど職員の本音も聞けるため、参加者にも「実際に働くイメージが持てた」などと好評です。

「定着支援」にも力を入れています。新社会人や他業種・他施設からの転職者は、慣れない業務や人間関係などで悩みを抱えがちです。そこで、施設・事業所に新任職員の身近な先輩としてマンツーマンで相談役を担う「メンター」の育成にも取り組んでいます。

人材センターは草津市(くさつセンター)と長浜市(長浜センター)にあります。中村勝弘所長は「どの職員も求職者一人ひとりの思いにあわせた親切・丁寧、伴走型の相談支援を心がけています」と話してくれました。伴走支援のカギを握るのが、キャリア支援を行う相談員です。舟橋由美子相談員は、相談員の役割を「求職者の思いを引き出して、寄り添いながら仕事探しの支援をすること」と言います。就職フェアや職場説明会参加者に、電話でその後の様子を探ねたり、見学会の案内をしたりして次の一步をとともに考えます。異業種からの転職者が、紹介した職場に長く勤め、介護福祉士となったそうです。「数年後に再会して『介護の仕事にやりがいを感じている』と報告を受けた時はうれしかったです」と振り返ります。長浜センターの藤田健介係長は、「介護・福祉の仕事は“暮らし”を専門的に支える大切な仕事です。人材センターの仕事はそこを担う大切な人材と地域の施設・事業所の橋渡しを担う仕事で、とても意義深くやりがいを感じます」と話します。伴走支援やSNSを使った積極的な情報発信などにより、マッチング数も増加。職員は柔軟な発想で取り組みを続けています。



(上) くさつセンタースタッフ (下) 長浜センタースタッフ
長浜センターは、令和4年10月から彦根駅前のアルプラザ彦根店内COZY TOWNに移転します。

えにしアカデミー

えにしアカデミー 1期生学びの軌跡

滋賀県社会福祉協議会では、これからの新しい福祉を創っていくため、意欲ある福祉従事者の専門性を深め、その社会的評価や職業イメージを高めるものとして「えにしアカデミー」を構想し、令和3年10月に開学しました。福祉人としての専門性や人間性に満ちた共感力で明日の滋賀の福祉をけん引するリーダー養成の場に、現在、志を同じくする1期生の仲間29名が集い、ともに学んでいます。

塾生の声③ 障害分野40代

ソーシャルワーカーができることは何かを考えながらも、大切なのは、この人に必要なことは何か、この人は何を求めているのか、という視点で見ること。その中で自分がこの地域の人たちとできることは何かを考え続けていくことを大切にしていきたいと思いました。

塾生の声② 児童分野40代

えにしアカデミーの講義をこれまで受けてきて、「あたたかい地域になるには、どうしようか」と、わくわくするような気持ちで考えていこうとする自分が、少しずつ育ってきているのではないかと、感じています。

塾生の声① 保育分野60代

一人の力で大きくことを動かすことは難しいですが、他分野の団体とつながりあうことで、新たな気持ちでその家族と向き合えることは、このえにしアカデミーで学んだことが生かされつつあると思わずにはいられません。

聴講生募集

えにしアカデミーに入塾していない方でも聴講生として登録をしていただくことで、えにしアカデミーの講義を視聴し、学べます。

詳細は「えにしアカデミー」ホームページから
<https://enishi-ac.jp>

塾生が所属する施設の声

特別養護老人ホーム施設長

えにしアカデミーで学ぶ中で、今までに知りえた知識と新しく学んだ知識を自らの「強み」としてどのように生かしていくのかを考えながら行動変容し、キャリア形成していけることを期待しています。学びの蓄積が自らの中で応用でき、今後大きな自信となり、地域や職場の課題解決や自己実現に活かせるものであってほしいと思っています。

老人福祉施設、
障害者支援施設、
児童福祉施設などに

**スケールメリットを活かした割安な保険料で
充実補償をご提供します！**

◆加入対象は、社協の会員である
社会福祉法人等が運営する社会
福祉施設です。

プラン1 施設業務の補償 (賠償責任保険、動産総合保険等)

① 基本補償(賠償・見舞)

保険期間 1 年

▶ 保険金額		基本補償 (A型)	見舞費用付補償 (B型)
賠償 事故	身体賠償 (1 名・1 事故)	2 億円・10 億円	2 億円・10 億円
	財物賠償 (1 事故)	2,000 万円	2,000 万円
	受託・管理財物賠償 (期間中)	200 万円	200 万円
	うち現金支払限度額 (期間中)	20 万円	20 万円
	人格権侵害 (期間中)	1,000 万円	1,000 万円
	身体・財物の損壊を伴わない経済的損失 (期間中)	1,000 万円	1,000 万円
	徘徊時賠償 (期間中)	2,000 万円	2,000 万円
お見舞い等	事故対応特別費用 (期間中)	500 万円	500 万円
	被害者対応費用 (1 名につき)	1 事故 10 万円限度	1 事故 10 万円限度
	傷害見舞費用		死亡時 100 万円 入院時 1.5~7 万円 通院時 1~3.5 万円

●この保険は全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約(賠償責任保険、医師賠償責任保険、看護職賠償責任保険、雇用慣行賠償責任保険、役員賠償責任保険、サイバー保険、普通傷害保険、労働災害総合保険、約定履行費用保険、動産総合保険、費用・利益保険)です。

●このご案内は概要を説明したものです。詳細は「しせつの損害補償」手引またはホームページをご参照ください。●

団体契約者 **社会福祉法人 全国社会福祉協議会**

〈引受幹事〉
〈保険会社〉
損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL : 03 (3349) 5137

受付時間：平日の 9:00~17:00 (土日・祝日、年末年始を除きます。)

取扱代理店 **株式会社 福祉保険サービス**

〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3 丁目 3 番 2 号 新霞が関ビル 17F
TEL : 03 (3581) 4667

受付時間：平日の 9:30~17:30 (土日・祝日、年末年始を除きます。)

(SJ21-12224 から抜粋)

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償！！

令和4年度

ボランティア活動保険

商品パンフレットは
コチラ
(ふくしの保険ホームページ)



保険金額・年間保険料 (1 名あたり)

団体割引 20%適用済 / 過去の損害率による割引適用

保険金の種類		プラン	基本プラン	天災・地震補償プラン	【新設】特定感染症 重点プラン
ケガの補償	死亡保険金		1,040 万円		
	後遺障害保険金		1,040 万円 (限度額)		
	入院保険金日額		6,500 円		
	手術 保険金	入院中の手術	65,000 円		
		外来の手術	32,500 円		
	通院保険金日額		4,000 円		
	特定感染症	補償開始日から10日以内は補償対象外(*)		初日から補償	
賠償責任の補償	地震・噴火・津波による死傷		×	○	○
	賠償責任保険金 (対人・対物共通)		5 億円 (限度額)		
年間保険料			350 円	500 円	550 円

*4月1日付で前年度から継続して契約される場合は初日から補償します。

<基本プランに加入される方へ>

基本プランでは、地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。

◆年度途中でボランティア活動保険に加入する場合には「特定感染症重点プラン」への加入をおすすめします。

例えば、被災地での災害ボランティア活動や当初予定していなかったボランティア活動への参加にあたり、新型コロナウイルス感染症をはじめとした特定感染症への備えとして、特定感染症重点プランに加入いただきますと、より安心してボランティア活動に参加いただけます。



ボランティア行事用保険

(傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

送迎サービス補償

(傷害保険)

福祉サービス総合補償

(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

●このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 **社会福祉法人 全国社会福祉協議会**

〈引受幹事〉
〈保険会社〉
損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL : 03 (3349) 5137
受付時間：平日の 9:00~17:00 (土日・祝日、年末年始を除きます。)
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

取扱代理店 **株式会社 福祉保険サービス**

〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3 丁目 3 番 2 号 新霞が関ビル 17F
TEL : 03 (3581) 4667
受付時間：平日の 9:30~17:30 (土日・祝日、年末年始を除きます。)

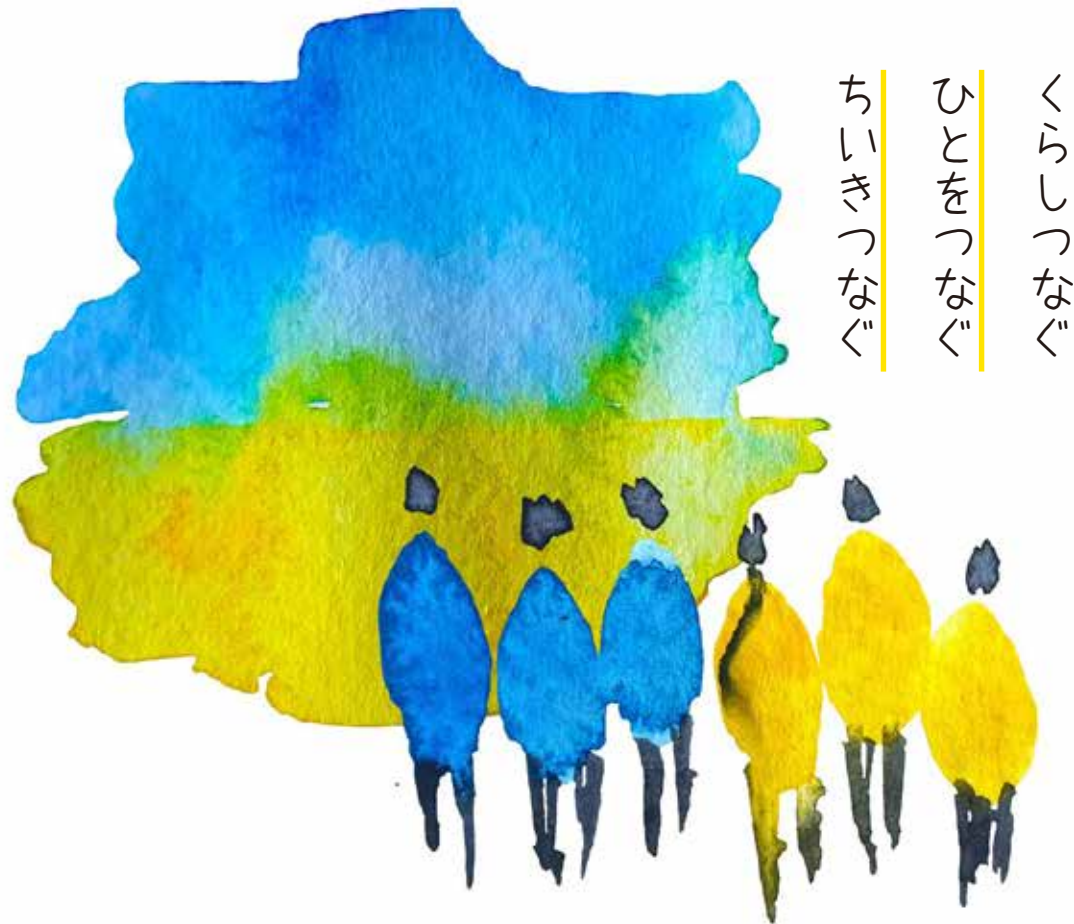
(SJ21-10723 より抜粋して作成)



くらしつなぐ ひとをつなぐ ちいきつなぐ

一般社団法人

滋賀県老人福祉施設協議会



くらしつなぐ
ひとをつなぐ
ちいきつなぐ

いま、ウクライナでは深刻な人道的危機により、多くの尊い命が失われ、
たくさんの方が苦境に立たされ、故郷を追われています。
滋賀県でも支援の一環として、自国の戦禍を逃れ、避難してきた方々を迎えています。

当会は、養護老人ホームやケアハウス、特養など高齢者施設等を経営する
滋賀県内 98 の事業所により組織し、介護サービスを安定的に提供することで、
ひとりひとりの暮らしを支えています。
平和の意味を考え、そしてできることを考え、やり遂げる。
社会福祉法人として、役割を果たしていきます。

事務局

〒525-0072

滋賀県草津市笠山 7 丁目 8-138 県立長寿社会福祉センター内

一般社団法人 滋賀県老人福祉施設協議会

TEL. 077-585-9380 FAX. 077-585-9381

Email shiroukyo@shiga-roushikyo.jp http://www.shiga-roushikyo.jp/





せんだん保育園
園長
中西 健さん



本当の「やさしさ」とは

「他人に親切にしない」
「他人に迷惑をかけてはいけない」
「困っている人がいたら、助けてあげなさい」
50年以上も前の母親の教えです。いったん家を出ると暗くなるまで帰らないやんちゃ坊主であった私ですので、ほとんど守れませんでした。母親の言葉だけは鮮明に覚えています。言うまでもなく「人にやさしい人間になってほしい」という親の願いで、この願いは多くの親に共通していたように思います。人や自然、環境に対して「やさしい」とことが求められていたからだと思います。
ところで「やさしい」の漢字には「優しい」と「易しい」があり、前者は「穏やか」な様子と「思いやり」の心を意味し、後者は難易の易で「難しくない」ことを意味します。今の時代「易しさ」の追求が求められていて、日常的なもので言えば、電話・計算機・家電製品など多くの機器がボタン1つ押せばそれ以上の手間はかからないようになっています。「手間」は手仕事の労力や時間のことで、そこには一人ひとりの工夫や努力の積み重ねがあり、コツの獲得や上達の喜びもありました。その「手間」を省くことでとても便利にはなりましたが、その分人間が怠惰になり、人任せ・機械任せが当たり前になったように思います。
この「易しさ」の無制限な追求が、地球資源の破壊や環境汚染につながって、自然や環境に「優しくない」社会を生み出したように思うのです。「易しさ」には「便利」が連動していて「易しさ」の追求

が情性的に「安易」な生き方につながってしまっているように思えます。
「易しさ」を求める一方で「優しさ」も求める、というのはどうなのでしょう。人任せ機械任せで楽をしようとしていて、人や自然や環境に「優しい」心が育つのでしょうか。先端技術を駆使しての便利さの追求がいけないと言っているわけではありません。しかし、それに慣れることから、いつの間にか手作りや手仕事の手間が疎んじられ、その苦労も喜びも無縁となった時に心の方も人や環境の「痛み」を思いやることから無縁になっていくのではないのでしょうか。
保育の現場にも、最近ではICTが導入されています。それぞれそれなりの価値や意味があります。しかし保育の本質は、やはり人間の等身大の手間仕事です。少なくとも人任せ機械任せでできることではありません。目の前の子どもの表情、仕草、言葉、全身の様子などから何かを察知し、それに応えることは、その場で保育に当たっている人自身の全人間的な感性と能力にかけられた仕事です。保育者その人が言葉だけではない「優しさ」を持ち、それを子どもたちと擦り合わせる時、本当の「優しさ」の教育ができるはずです。
本当の「優しさ」とは決して「安易」ではない。むしろそこには「安易」を排する「厳しさ」も「勇気」も「強さ」も「忍耐」も含まれていて、それが結局は、人や自然や環境に対する「優しさ」を育むことにつながると思います。

滋賀の縁創造実践センター
(滋賀県社会福祉協議会)



縁特別会員 ご入会のお願い

滋賀の福祉の充実をめざして

滋賀に暮らすだれもが「おめでとう」と誕生を祝福され「ありがとう」と看取られる地域社会をつくるという滋賀の縁創造実践センターの理念を具体化するため、滋賀県社会福祉協議会は制度のはざまの支援や生きづらさを抱えた人と地域の架け橋づくりなどに取り組んでいます。

縁特別会員制度は、滋賀の縁創造実践センターの実践を支える会員制度です。民間福祉の実践者のみなさま、また「持続可能な開発目標(SDGs)*」に共感する企業や団体のみなさま、縁特別会員に加入賜いますようお願い申し上げます。

*持続可能な開発目標(SDGs)には、「我々はこの共同の旅路に乗り出すにあたり、だれ一人取り残さないことを誓う」という理念が掲げられています。

みなさまの会費は、現在これらの事業に使わせていただいています



子ども食堂の食事風景



はたらく体験での作業風景



フリースペースでボランティアの方と遊ぶ子どもたち



仕事体験PARKでの助産師体験

えにし共生の場づくり、制度のはざまへの支援、生きづらさを抱えた人と地域の架け橋づくり— 共生社会への営みを「縁架け橋」と名付け必要な事業を企画・実施していきます。



「共生型サービス」普及のための
研修会(オンライン)にて実践報告

滋賀県保育協議会との共働事業

待っている人たちがいる！ 制度のはざまへの取り組み、縁共生の居場所づくり

【入会のお申込み・お問い合わせ】 社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 総務課

TEL 077-567-3920 FAX 077-567-3923 <http://www.shigashakyo.jp/>
〒525-0072 滋賀県草津市笠山7丁目8-138 (県立長寿社会福祉センター内)

編集後記

今回の「ひたすらつながりフォーラム」で、なぜ水俣がテーマなのか、最初のころ自分の中で上手につながりませんでした。でも、上野さんが静かに語られる一つひとつの言葉が心に刺さり、取材を忘れて聞き入ってしまいました。今回の特集は、そんな上野さんの言葉をできる限りそのまま伝えられたら…という思いで作成したページです。みなさんにとっての「幸せ」や「共に生きる」ことを考えるきっかけになれば幸いです。(黄瀬)